

Title	聊齋志異研究序説：特に蒲松齡の執筆態度に就いて
Sub Title	Introduction to the study of "liao chai chih i" (聊齋志異) : with special reference to the author's attitude
Author	藤田, 祐賢(Fujita, Yuken)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1954
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.3, (1954. 1) ,p.49- 61
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00030001-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聊齋志異研究序説

——特に蒲松齡の執筆態度に就いて——

藤 田 祐 賢

清の蒲松齡の「聊齋志異」が、中國古來の筆記小説の系統を引く數多い文語體の小説の中に在つて、短篇小説として最も傑出してゐるということは、既に定評となつてゐる。事實その優れた小説的描寫と絢爛たる文章の藝術的香氣とは、同類の他書には求め得られぬところである。それだけに、著者蒲松齡のこの書の執筆態度が、「志異」を論ずる人達の間では相當に大きな問題とされ、これに就いて、從來中國及びわが國に於いて種々に論ぜられてきた。それら從來の諸説を検討してみても判ることは、種々に論じてはいても、著者が何らかの目的を持つて執筆してゐるとみている點では殆どが揆を一にしており、しかも多くの人達が、その著者の執筆の目的として勸善懲惡というところを取り擧げていることである。橘樸氏がその「聊齋志異の研究」(「道教と神話傳説」所收)の中で、蒲松齡は「民衆の安樂にして幸福なる生活に對する最小限度の希望すら當時の政治惡及び社會惡のために脅かされて實現の機會が甚だ乏しい」のを憤り、且つ當時の民衆が「無知なるが爲に、眼前の或る官能の満足を追ふに急で、これを調節することが眞の自己及び社會を平和幸福ならしむる所以であることを覺らない」のを嘆いて、「志異」の筆を執つた、とみているのは、その代表的なものとして擧げられよう。このような見方は、「志異」の物語そのものから導き出されてきたというよりか、寧ろ各篇の項末に「異史氏曰」と題して附された著者自身の感想評論の短文と、「志異」の自序とを基礎としてなされた考察から出てきたものであり、しかも多くの場合、張元の書いた松

齡の墓表文や、松齡の孫の清立應の記述、更には「志異」の最初の刊行者趙起杲の刻聊齋志異例言等によつて半ばは無意識的に影響を受けてきているように思われる。しかしそれらは、結局に於いて「異史氏曰」中にみられる著者の訓戒的態度と當時の役人に對する憤懣の情や自序の駢體文によつて眩惑され、或いは中國古來の傳統的な觀念を無批判に受け入れた結果、生じてきた見方であると、わたしは思う。わたくしに言わせれば、「異史氏曰」中にみられる著者の訓戒的態度や時政に對する憤懣の情は、「志異」を執筆する著者の態度とは直接的關係のあるようなものではないし、駢體文の自序も、その修飾性の色濃い文字によつて表現されている意味を、從來は適確に把握していないで、あまりにもそこに使用されている語句に引きづられてしまつてゐる。また中國古來の傳統的觀念と言つたのは、中國の知識階級の人達が小説に對して持ち續てきた觀念を指す。この觀念は、最初の小説に對して作り出された一つの解釋であつたと思われるが、それが傳統的に承けつがれてゆく間に固定化して一般的觀念となつてゐたらしい。即ち、知識階級の所謂「君子」に屬する者は、本來「小人」の庶民の文學である小説に對して、表面的には無關心の態度を取るか、或いは輕蔑の眼を向けていたが、事實は彼等自身も小説に對して大きな興味を抱いてゐた場合が多く、自分達が小説を表面に取り擧げねばならぬような時には、その小説には社會的な意義があるからだ、という勝手な理由を附加してしまふ。「漢書藝文志」に見られる小説家に對する史家の所論の態度は、知識階級の小説に對する前述のような考え方の明瞭な現れである。「漢志」のそういう所論は歷朝の史家によつて傳統的に繼承されているが、これは實に中國知識階級の小説に對する一つの觀念を代表してゐるものである。「志異」もそういう觀念をもつて見られてゐるのであつて、張元が「事は荒幻に涉るも斷引謹嚴、廢俗を警發し、道教を維持するが爲なり。」と記し、蒲立應が「其の事は多く神怪に涉り、其の態は歷代の志傳に倣ひ、或ひは時に觸れ事に感じ、勸を以てし懲を以てす。」と言ひ、趙起杲が「其の義は則ち竊かに春秋微顯志晦の旨に取り、筆剋豫奪の權、名教に功ありと謂ふべし。」と述べたのは、いづれも明らかにそれである。しかし我々は、この類の言説が、それを附加された小説とは本來何の關係もないものであることに氣がつかねばならぬ。隨つて「志異」の執筆について考察する場合、張元等の言説には一顧も與える必要のないことを、わたくしは斷言して憚らない。眞の「志異」執筆の態度は、自ら進んで自序の意味を適確に把握することにつとめ、それに「志異」の物語そのものに對する詳細な觀察と、松齡という人間に對する多角度

からの觀察とを併せ、更に「志異」以外の彼の著作——とくにその文藝的なものの執筆態度にも眼を向けることによつて、始めて明らかにされ得るものと思つてゐる。

二

康熙十八年（一六七九）、蒲松齡が四十歳の時に書いた「志異」の自序は、彼自身が「志異」の執筆の態度、情況に就いてかなり詳しく述べている一文ではあるが、修飾性の強い駢體文であること、彼が序文を書くという改つた氣持になつてゐる爲に、多少のポーズを取つてゐることを一應念頭に置いて扱う必要がある。その前半の部分は、

「蘿を被り荔を帶び、三閭氏感じて騷を爲り、牛思蛇神、長爪郎吟じて癖を成す。自ら鳴る天籟、好音を擇ばざるは、由つて然る有り。松は落々たる秋螢の火、魑魅光を爭ひ、逐々たる野馬の塵、罔兩に笑はる。才は干寶に非ざるも、雅より搜神を愛し、情は黃州に同じく、人の鬼を談するを喜ぶ。聞けば則ち筆を命じ、遂に以て編を成す。之を久しうして四方の同人、また郵筒を以て相寄す。因りて物は好を以て聚り、積む所益々夥し。甚だしきは、人、化外にあらず、事、或ひは斷髮の郷よりも奇なり。睫、目前に在り、怪、飛頭の國に過ぐるあり。とく逸興を飛ばし、狂もとより辭し難し。永く曠懷を託し、癡すら且つ諱まず。展如の人、我に向ひて胡蘆するなきを得んや。然れども五父衢頭、或ひは濫聽に涉り、而して三生石上、頗る前因を悟る。放縱の言も、未だ概して人を以て廢すべからざるものあり。」

というのであるが、冒頭から、「風變りな楽しみに耽つて、そこから離れられず、しばし豁達な思いに我をまかせ、馬鹿のようになつてゐることさえ厭はない。眞面目な人は、きつとこの自分のことを笑うに違ひない。」と述べてゐる所までは、實に明瞭に彼の執筆の態度、情況を示してくれる。即ち、自分にとつてはこの怪異譚を執筆しないではいられぬ、という氣持を最初に述べ、次にその理由として自分が性來そういう物語をこの上もなく好んでゐることを言い、更に、その爲に自身で怪異譚の蒐集を續けてきたが、長い間に

は、他人までも同類の話を知らせてくれたりして、好きな爲に夥しい数の話が手許に溜つてきたが、自分はそれらの珍奇な物語に接すると、憑かれたように無中になつてしまわざるを得ないのだ、という意味を誌しているのである。この記述によれば、「志異」の執筆の動機は、明らかに彼個人の興味に出ていることが知られる。「志異」の「考城隍」の末尾に「宋公が自分で記した小傳があつたが、惜しいことには兵亂の後なくなつてしまつた。これはその概略である。」と誌しているところを見ると、彼がこの話のもとになつた書を少年時代に眼を通していたことが推察されるから、恐らく年少の時からこの類の物語に大きな興味を抱いていたのであろう。ただ附け加えて置かねばならぬことは、明末清初の世を風靡していた文人の怪異譚執筆の流行という事實である。松齡が怪異譚を好んだことは、彼自身の言つているとおり確かに彼の性向によるものには違ひないと思うが、それを執筆したということの裏には、當時の流行による影響を大いに認めねばならぬであらう。

「志異」の物語が民譚を材料として書かれていることは、それらを一讀すればすぐに判るが、ここで一つ問題となるのは、松齡が民譚をどのように取り擧げたか、ということ、これを更に具體的に言えば、松齡は民間に伝えられた話の内容をそのまま取り擧げて執筆したのか、或いは民間の話を材料として彼の創作力によつて全く新しい物語を創作したのか、ということである。このことは、「志異」を研究する者にとつて特に注意を集中すべきことである。この問題を處理するには、「志異」そのものを綿密に調べねばならぬ。しかもその場合、常に民間傳承の知識をもつて考察を進めてゆくことが是非とも必要である。ところが従來は特にこの民間傳承の知識をもつて「志異」の物語に對することをしないで、それが他の怪異譚の書と異り著しく創作性を帯びている爲に、直ちに著者の純創作品であるときめてかかつてゐる。魯迅が「中國小説史略」の中で、「志異」は當時の民譚を材料としたほかに、「鳳陽士人」、「續黃梁」等のように唐代傳奇に基いて創作したものもある、という考え方をしているのも、彼に民間傳承の解釋力が皆無であつたことを證明している。もしも民間傳承の知識をもつて臨み、同類の書及び現代の民譚にみられる同類型の話との比較對照を行つてみれば、「志異」の殆どが一つの民間傳承を、少くとも内容の點に於ては、そのまま取りあげたものであることが判るであらう。このことは、前掲の自序の中の「聞くとそれを執筆し」と述べているのでも大凡は察せられるが、「志異」の各篇の誌し方を詳細に觀察しても考えられると

ころである。即ち、まず松齡自身が、物語の材料の出所や見聞者を明記している篇のあることに注目される。例えば、「巧娘」の終りに「高郵の紫霞翁（松齡と親交のあつた高郵のこと）が廣東に旅行した時、この話を聞いた。」と誌しているが、これによつてこの物語は他人が聞いて彼に知らせたものであることが判るし、また「某乙」の「乙は酔つた後、時々その話をするのだつた。」という記述から、この話は、彼が乙なる男から直接に聞いたことを誌したことが知られる。この類の記述は、「志異」の四百四十五篇（趙起杲本所收のもの）の全部にあるわけではなく、數の上からみれば、ごく少數である。しかしそれらの記述中にみられる人名の中に、畢載積、高念東、畢怡庵、王子選、李文玉、玉璣、孫景夏等々、松齡の先輩や友人や知人として交渉のあつた人達の名があることに注目すべきである。なぜならば、このことから、特に人名を誌したのは、それらの人達が松齡のよく知つてゐる人や親しい人であつた爲ではなかつたか、と考えられるからである。またそのような記述がない篇でも、他人が松齡に話したり知らせたりしたものであることは、「林四娘」、「竹青」、「八大王」、「神女」の四篇中にみられる次のような記述によつて推察することができるのである。

○詩中重複脱節、疑傳者錯誤。

（林四娘）

○魚容湖南人、談者忘其郡邑。

（竹青）

○臨洮馮生、傳忘其名字。

（八大王）

○米生者閩人、傳者忘其名字郡邑。

（神女）

右の中の傳者、談者の二語は、これらの篇が他人によつて松齡に伝えられたり語られたりした物語であることを明示しているが、この四篇だけに傳者や談者という語のみられるのは、これらの物語が、偶々錯誤や不明な點を含んでいた爲であつたから、逆にそういう點のない物語では、特に傳者や談者という語を一々誌してそれらが他人から知らされたものであることを明示するという意識が、松齡の執筆の場合には働かなかつたものと思われる。更にまた、「林四娘」等の物語を松齡に傳えた人達が、その名を明記されずに、單に傳者とか談者という語で表されていることを、前記の、特に名を明記された人達が松齡にとつて相當の關係があつた人達であつたろうということとあわせて考察してみると、見聞者が明瞭に記されてな諸篇いは、松齡にとつては大した關係もないような人達が彼に傳えた

ものであつた、と考えられる。自序の中でも「五父衢頭、或いは濫聴に渉る。」と、彼自身が道に出て多くの人達から話を聴きたいという意味を述べていることから考えてみても、わたくしのこの推量は當つていると思われる。以上のような他人の見聞を記したものの以外に、「偷桃」、「花神」等のように松齡自身の経験を誌した篇もあるから、「志異」の物語は、自序にも述べられているように、彼自身と他人との見聞を基としていることは明瞭であろう。しかも前記四篇の記述によつて、彼の執筆態度は、自己及び他人の見聞のままを誌するという態度であることが知られる。このことは「異史氏曰」として司馬遷の「史記」の體に倣つていることにも表れている。随つて彼の執筆した各篇が、自己及び他人の見聞のままの内容のものであると見做してよいであろう。少くとも話の主題と筋の點では、民譚と全く變りないので、松齡の創作力によつて、民譚の筋を變えたり、幾つかの民譚を材料として全く別個の新しい物語を創り出したものではないと思う。しかし物語の主題と筋とは民譚のままではあつても、著者が執筆する場合、即ち表現の點では、明らかに民譚とは相違があつたと考えられる。なぜならば、著者が傳奇體の筆法を用いてあれだけの細い優れた小説的描寫を行つたのは、著者が民譚のもつ特異な内容を出來得る限り適確に表現しようとする明確な意識を充分に働かせていた爲と考えられるからである。この意識のもとで、多くの典故を巧みに織り込んだ著者独自の簡潔な文語によつて、民譚が最高度に藝術的に表現されたのである。随つて著者が最も力を注いだ點は、民譚の内容をいかに表現すべきか、ということである。かくして「志異」が他の多くの怪異書と同じく民譚を記したものでありながら、それらとは全然別個の優れた文學作品として、光輝を放ち得たわけである。その表現の點だけに就いて言えば、創作という語をあてはめても決して不當ではない。ところが普通は、著者の創作意識を前述のようには考えずに、著者の創作力が物語の主題や筋にまで働いていると考え易いのである。例えば高林靜天氏の「聊齋志異の狐達」(中國文學第六十二號所收)の中に見られる同氏の考え方がそれである。同氏によれば、「志異」の狐説話は、著者が狐を素材とし、その狐の世界を愛情中心に構成して、しかも登場する狐達に理想的な人間性を賦與して創りあげた物語であるという。その物語に對する觀察は相當に綿密なものであることは認めるが、物語を民譚として取り扱わなかつた爲に、著者が掘りあげた民譚に元から備わつていたことまで、著者によつて創作されたものと考えてしまつたところに大きな誤謬がある。こういう考え方は、物語を民間傳承的解釋力をもつて分析してみれば、その誤謬であるこ

とは直ちに判明する筈である。狐説話中の狐にみられる人間以上の人間的要素——例えば狐の女主人公が絶世の容色であつたり、道德的にみて遙かに人間にまさつた徳義を持つていたりすることは、民譚の中でも狐が備えていたことであり、なにも「志異」の物語だけにみられるものではないのである。ただそのような點も、著者の藝術的天分の優れた表現力によつて、「志異」の物語では特に美しく或いは高く描寫されていることは、わたくしも充分にこれを認めるものである。

三

自序の前半の終りの「三生石上、頗る前因を悟る。放縱の言も、未だ概して人を以て廢すべからざるものあり。」という部分は、自己の趣味に没頭する自分をふりかへつてつくづく考へてみた著者が、これも宿命の爲せる業に違ひなく、空想的な物語にも考へさせられる人生の道理がある、と考へたことを示しているが、そのように考へた松齡は、引き續いて自序の後半で次のように自己の執筆と身の上について宿命論的な回顧をしている。

「松、縣狐の時、先大人、一病瘡の瞿曇、偏袒して室に入り、藥膏錢の如く、圓く乳際に黏するを夢む、寤めて松生る、果して墨誌に符す。且つまた少きとき羸弱して多病、長命猶^{なほ}じからず。門庭の凄寂は、則ち冷淡なること僧の如く、筆墨の耕耘は、則ち蕭條たること鉢に似たり。つねに頭を搔きて自ら念ふ、また面壁の人、果して是れ吾が前生なるなからんや。蓋し漏根の因あり、未だ人天の果を結ばず、而して風に隨ひて蕩墮し、竟に藩溷の花となれるならんと、茫々たる六道、なんぞ其の理なしと謂ふべけんや。獨り是れ子夜、焚々として、燈昏くして盡せんと欲し、蕭々瑟瑟として、案冷えて冰かと疑はる。腋を集めて表と爲し、妾りに幽冥の録を續け、浮白、筆を載せ、僅かに孤憤の書を爲^{つく}る。寄託すること此の如きは、また悲しむに足る。ああ、霜に驚く寒雀は、樹を抱きて溫無く、月を弔ふ秋虫は、園に偃^よりて自ら熱す。我を知る者は、それ青林黑塞の間に在るか。」

この中に色濃く見られるのは、人生に對する松齡の宿命論的な考へ方であるが、このような考へ方は、松齡という人間に於いては、

思想と呼ぶよりか、寧ろ信仰と言つた方が適切であろう。彼が中國の一般民衆と同様の道教的信仰をもつていたことは、「志異」の物語に對する感想文の中にも明瞭に現れている。次にその幾つかの例を擧げてみる。

○人は死ぬと魂が散つてしまふが、それが千里もの遠い間を散ることなくかよつて行つたのは、その人の性が定まつていたからにほかならぬ。わたくしは、彼が僧侶に生れかわつたのを不思議だとは思わない。(長清僧)

○魂は知己に従ひ、遂には死んですることも忘れてしまふ。この話を聞く人は疑うけれど、自分は深くこのことを信じている。(葉生)

○わたくしの常に言うことだが、先祖代々の修業がなくては、高官を求め得られるものではなく、また自分自身の幾世にもわたる修業がなければ、佳人を得られるものではない。因果報應を信ずるものは、きつとわたくしのこの言葉をでたらめだとは思ふまい。(毛狐)

○ある人は「世の中の悍妻じやうさい」には、この話のようなものが少くない。あの世の法律に疎漏の多いのが恨めしい。」と言うが、わたくしは言う、「いやそうではない。あの世の罰には釘付けの刑罰よりもつとひどいものがないわけではない。ただそのような消息がこないだけのことだ。(圖王)

○人は新鬼が祟りをするのを知っているに過ぎず、古鬼が人の魂を奪うのを知らないのだ。(姚安)

彼は元來讀書人の家に生れ育ち、儒教的教養を身につけた人であるから、「異史氏曰」の大部分が儒教的な訓戒であつたり、儒教道德の根本である天の觀念にその安心立命を置いている「原天」のような文章を残しているのは當然であるが、そういう儒教的な考え方よりも根本的に松籬の考え方を強く支配していたのは、人生のすべての關係を悉く前世の因縁因果と觀察してしまふような人生視であつた。彼が「志異」にみられるような一般民衆の信仰に裏付けられた物語に非常に共感してその執筆に没頭したことも、また百回にも及ぶ、夫を宿命的に刺する悍妻を描いた白話體の長篇小説「醒世姻緣傳」を執筆したのも、みなこのような彼の人生視と密接な關係があることに注目せねばならぬ。

自序の中で、彼の人生視をもつて自己のひたむきな執筆の情況を回顧した著者は、更に現在の自分の身の上にも言及して、「思うに煩惱の去ることなくして輪廻を逃れ得ず、爲に人間としての實をも結ばずに、風に吹き漂はされて、果ては厠に散つた花びらの身とに

なつてしまつたのであろう。自分がこうなるにも、必ずやそれだけの道理があつたに違いない。」と述べたが、この敘述は、彼自身が痛切に不幸であると感じていた何かが、その身の上にあつたことを直感させる。しかもその不幸を悲しむ氣持は、宿命論的な考え方によつて抑えられ宥められている形であるが、その代りになんとなく淋しい感情が滲み出ている。この敘述の後で、「志異」という幽冥の物語を書くことに思いを託する自分を悲しみの情をこめた眼で眺め、更にこの自序の終りで、獨りこのような物語の執筆に熱中している自分を眞に理解してくれる者の、おそらくないであろうことを述懐しているのをみると、彼が悲痛に感じていたことが、彼を「志異」のひたむきな執筆へ向わしめた一つの大きな契機となつていたように考えられてくる。随つて、彼が我が身の上の不幸と感じていたことを、その生涯の中に探つて明らかにすることが、彼の執筆の眞の姿を理解する上に極めて重要なこととなつてくるのである。

四

蒲松齡は、明末の崇禎十三年（一六四〇）に山東淄川の蒲家莊に生れ、清の康熙五十四年（一七一五）に同地で死んでいるが、その七十六年の生涯の中で一際目立っていることは、七十歳近くまで科擧に應試している事實と、三十三歳から七十一歳までの間、蒲家莊から程遠からぬ王村の權勢家の畢家に於いて家塾の教師をしていたこと、及び詩文、小説、戯曲、彈詞、鼓詞等の文學的な作品から醫藥、農業、曆數等の雜著に及ぶ廣範圍の執筆生活である。なかでも科擧應試は、松齡という人間が最も希望していたことと直接に關係があるので、特に注目される。

淄川縣誌、張元の書いた墓表、松齡の長男蒲箬が父に就いて記した記述等を綜合してみると、松齡は十九歳で童子試を受け、縣府道の三つの試験に第一の成績を擧げて博士弟子員（生員）に補せられ、學使であつた有名な詩人施愚山にその文才を認められ、爲に彼の文名は生員間の評判となつたという。随つて彼の文才は、當時既に衆に優れていたと言えるわけだが、それにもかかわらず、その後の鄉試には何回か受験したが遂に合格しなかつた。墓表文では、鄉試に落第した松齡が慨然としてその天命であることを歎じ、決然とし

て考試の念を斷つてしまつたように言つてゐるが、事實はそうではなかつた。彼が童子試を受けた年からその没年までの間には、十九回の郷試が行われている。そのうち何回彼が受験したものか、明確には知ることができない。しかしその最初の受験が、彼と親交のあつた同村の先輩の孫恵が進士になつた年の前年、即ち順治十七年、彼二十一歳の時であつたことと推定しても、殆んど間違ひのないところであらう。「志異」の「王子安」に對する感想文の中で彼は、最初に科擧に落第した生員の様子を、「落膽して試験官を盲人と罵り、筆墨の靈なきを悲しんで、勢い必ず案頭にある物を盡く火中に焼べてしまふ。それでも飽きたらず、それを踏み碎き、更にそれを濁流に投げ込む。次いで髪をふりみだして山中に入り、石壁に面して坐つてゐる。もしもそのとき、且、夫、嘗、謂、などという文章を自分に見せる者でもあつたら、きつと戈をとつて逐いはらつてしまふに違ひない。しかしまもなく日がたつにつれて氣持が次第に落ち着いてくると、腕がむづむづして、あたかも卵を破つた鳩が木を銜えて巢を營まざるを得ないように、改めてやりなおしをするのである。」と述べてゐる。ここに描き出された不合格者の姿は、松齡自身の姿であつたとは斷言できないまでも、彼自身もまた同じ様や氣持であつたのではあるまいか。少くとも彼が自分の過去の姿を回想しながら、この一文を書いたことは確かであらう。聊齋遺稿蒐集家の平井雅尾氏が藏している「壬寅青雲集」（松齡手抄本）という詩集は未見ではあるが、その題名から推察すると、多分官吏となつて立身出世したいという大志を詠じた詩集であらうと考えられる。恐らく彼は最初の不弟によつて考試を斷念してしまつたのではなくて、「王子安」の「異史氏曰」に述べられたようにまもなく氣を取りなおして再び受験準備にとりかかり、右の詩集を書いた二十三歳の頃には、郷試合格を夢見ていたことであらう。

彼が何度郷試に應じたかは、前述のように明確には判らぬが、屢蹶生となつて學資を貰うことになつたその翌年の四十八歳で受験して、またも不合格となつたことが、その年の秋に書かれた「責白髭文」の冒頭に「稷門より鍛羽して歸る。」と、明らかに濟南から志を失つて歸つてきたのを誌していることによつて知られる。この一文は、不弟の苦杯を嘗めて歸宅した松齡が、鏡に映る自分の白髭をみて感憤し、白髭を責める文章を書いたところが、夢中に髭神が現れて、逆に松齡がいつまでも合格できずにいる不甲斐なさを責める、という内容であるが、そこには、彼の自嘲の氣持が色濃く浮び出ている。この中で彼は、「自分は現在縣命になつて勉強し、官吏となら

んことを望んでいる。」と卒直に自己の氣持を告白し、また「お前（白髭のこと）は、今年も一本、來年もまた一本といった具合に、營々として生え出てきて、あたかも眞夏に禮装して伺候する迂闊な客のように、別れたかと思うとまたくるし、野草のように、刈り盡してもまた生え出てくる。」と、何度失敗しても懲りずに受験する自分の姿を回顧して、自嘲的に述べている。七十四歳の時に亡妻の生前に就いて詳述した「元配劉孺人行實」の中にみられる彼自身の述懐によれば、年五十餘りになつても、なお立身出世の念の去ることがなかつたが、妻が「あなた、もうお止めなさい。もしあなたにそのような運命が許されているのだしたら、今頃はもう大臣になつてゐる筈です。こうやつて田舎に住んでいまして、自然と楽しみはあるものです。なにもそのような苦勞をなさることはありませんでしょう！」と忠告したので、成程そのとおりだとは思つたのであるが、やはり名利に焦れる氣持は消え失せず、それどころか同じく生員になつた子や孫の受験する姿を眼前にみていると、どうにも自分の慾望を抑えきれないで、時々その氣持が言葉の上にも現れてしまふ、といった具合であつたが、妻が一向に取りあつてくれぬので、或る時には妻の御機嫌を取つて、今度はめでたい前兆があつたから必ず合格する、と言つたとのことである。この述懐は彼の強い現實的な慾望を實によく語つてゐるが、この慾望は五十以後も依然として持ち續けられ、六十代になつても受験している。六十三歳、六十六歳、六十九歳の各年には郷試が行われているが、そのいづれの年にも濟南に行つたのは、受験の爲であると推定される。特に六十九歳の濟南行の時には、試験場の情況や受験者の様子と、それについての感想を詠んだ詩四首が残されているし、「元配劉孺人行實」の中には「七十になつて寄る年波で、もう受験をしに行かなかつた。」と言つてゐるから、この年に最後の受験をしたことは、略々確實であらう。

右の觀察によつて、松齡の官吏となつて立身出世したいという現實的慾望がいかにも絶大であつたかが知られる。それが絶大であるだけに、不弟という惨めな結果は、他人には想像も及ばぬ程の悲しみの底に彼を沈ませたに違いない。また自分の才能を認めてくれぬ試験官に對して憤りを覺えたことであらう。しかしそのような悲憤も、彼の宿命論的な考え方によつて抑えつけられ、宥められてしまい、決して外に向つて爆發することなく、そのまま心に鬱積してしまつたに違いない。同時にそこには深い寂寥感が當然生じてきたことと思われる。前に言及した自序の中に滲み出ている淋しい感情は、そういう心内の寂寥想につながるものであらう。そしてこの寂寥感

に惱む彼の魂を慰め得たものが、彼の文學であつた、と考えられる。彼が性來好きな怪異譚を執筆することに没頭したのは、それが彼の言いしれぬ寂寥を慰め、鬱積した悲憤の吐け口となつていたに相違ない。彼が何時から怪異譚の執筆を始めたのか、正確に知ることはできぬが、前述のとおり科擧不弟という蹉跌が執筆の一つの大きな契機となつていたとみられる上に、二十九歳に「地震」一篇が誌されているから、二十一歳以後三十歳までの間に開始されたことは間違いないと思う。しかも「夏雪」一篇は六十八歳の執筆であるから、その執筆期間は約五十年という長年月に及んでいるわけである。四十歳で自序が書かれた理由も明確に知ることはできぬが、何かの理由で一應纏まつた形にされたのであらう。しかしそれ以後も依然として怪異譚の執筆は續けられたのである。趙起果本に收められていない逸篇が相當數にのぼつてゐることは、「聊齋志異拾遺」や他の幾つかの寫本によつて知られてゐる。この怪異譚の執筆の外に、他の小説や、戯曲、小曲（鼓詞）、俚曲（彈詞）等の數多くの文學作品も執筆されている。これらの中で怪異譚と同様に早くから執筆されてゐたのは小曲らしく、平井氏蒐集の「夜雨思夫曲」は二十七歳の作である。しかも聊齋小曲（平井氏蒐集六十數曲）の内容は殆どが皆男女の情に關係しており、中には「五更合歡曲」、「新婚宴曲」（四十二歳作）等のように、閨房内の男女を巧みに描寫し、「志異」同様の所謂濃艶嬌癡の色彩を呈するものがあることは、彼が好んで男女の情を扱い、それを表現する優れた文才を有していたことを示すものとして注目するに値しよう。彼の俚曲には、「姑婦曲」、「慈悲曲」、「翻塵殃」、「饅頭呪曲」等のように、「志異」中の物語に取材したものがみられると共に圓熟した彼の文才が窺われるから、それらの執筆は、「志異」や小曲より遅れていたと考えられる。「醒世姻緣傳」もその内容と暢達自在な筆の跡から考えると、やはり「志異」よりは遅れて執筆が始められたのであらう。これらの文學作品の執筆は、「志異」の執筆同様の意味をもつていたに相違ない。このように「志異」をはじめとした多くの彼の文學作品の執筆は、科擧不弟に原因する彼の心内の苦悶、悲憤、寂寥等と密接な關聯を持つていたのである。即ち、それらは彼が自己の消閑排悶を第一とした遊戯三昧の藝術であつたと言える。しかしこゝで一つ問題とされると思うのは、「志異」の自序の中でこの書を「孤憤の書」と言つてゐることである。この言葉があるために從來は著者が何かに憤激して執筆したものと考え易かつた。最初に述べた從來の勤善懲惡の目的をもつて執筆されたという考え方など明らかにこの言葉に眩惑された結果生じてきたものである。しかしわたくしは前述のような考察

からして、この言葉は松齡が「志異」を執筆することにより自己の心内の鬱積した悲憤の情が慰められていたことを表現した言葉であつたと考えている。

(以上)